

Motomura Sugimachi

本村・杉町遺跡 1

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第138集

2022

八女市教育委員会

Motomura Sugimachi

本村・杉町遺跡 1

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第138集

2022

八女市教育委員会

序

八女市教育委員会では、市内に多数存在する遺跡のうち、工事等で現地に遺すことが困難となった遺跡の発掘調査を実施しています。今回の報告は、令和3年度に店舗建設に伴い、八女市本村地内で実施した発掘調査等に関し、報告するものです。

本村・杉町遺跡の今回の事業地内には、弥生時代から中世にかけての集落遺跡が展開していることが判明しており、今回の調査ではその集落に隣接すると思われる自然流路が発見されました。また、八女市内では出土が少ない縄文時代の土器も発見され、更なる知見が得られました。今後の周辺事例の増加で、集落遺跡の様相が更に明らかになっていくことが期待されます。

今後も文化財を保護し、やむを得ず破壊される遺跡は必要な記録を作成し、八女市の過去を知る重要な資産である文化財を、未来に継承していく取り組みを継続したいと思います。

このたび発掘調査報告書を刊行するにあたり、本書が学術資料として活用されるのはもちろんのこと、文化財の保護や理解普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や報告書作成にあたり、ご協力いただきました事業主体のダイワロイアル株式会社様、並びにご指導・ご助言いただきました多くの方々に感謝の意を申し上げます。

今後も八女市の埋蔵文化財行政にご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

令和4年3月31日

八女市教育委員会
教育長 橋本 吉史

例 言

- ・本書は、八女市がダイワロイアル株式会社の委託を受けて、店舗建設に伴い実施した福岡県八女市本村字杉町所在、本村・杉町遺跡第1次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- ・本報告の発掘調査は令和3年度に八女市教育委員会が実施し、八女市役所教育部文化振興課の木原 堯・平俊隆・檀佳克が担当した。
- ・本書で使用する方位は座標北である。なお、発掘調査の測量基準点の設置は大成ジオテック株式会社に業務委託した。
- ・本書で使用した遺構実測図は現地調査実施時に、檀・木原が作成した。なお、土層図は、調査終了後に再検討を行い、加筆・修正をした。
- ・本書掲載の遺物実測図の作図、遺構実測図および遺物実測図の製図は、八女市文化財整理室において木原・平および整理事業員が実施した。
- ・本書掲載の写真は、遺構写真は木原、遺物写真は木原・平が撮影した。
- ・本書の執筆は、事実報告を木原・平、総括を甲斐郁・檀が行い、編集は八女市文化振興課職員の指導の下、木原が行った。
- ・発掘調査時の現場図面・写真等の記録類および出土遺物は八女市教育委員会で保管している。有効な活用を望む。

目次

本文目次

1 調査の経緯と経過	1
2 遺跡の位置と環境 (地理的環境・歴史的環境)	2
3 調査の方法と成果	
A 発掘調査の概要・方法	
① 基本土層	3
② 発掘調査方針・経過	3
B 発掘調査の成果	4
4 遺構と遺物	
A 遺構	
① 1号溝状遺構 (SD01)	5
② 2号溝状遺構 (SD02)	6
B 遺物	
① 土器	
a SD01下層出土土器	6
b SD01上層出土土器	9
c SD01出土土器	9
d 表土層出土土器	9
② 石器	
a SD01下層出土石器	10
b SD01上層出土石器	11
c SD01出土石器	11
d 表土層出土石器	11
e 石器剥片	11
5 総括	12

挿図目次

第1図 本村・杉町遺跡の位置 (S=1/1, 250, 000)	1
第2図 本村・杉町遺跡の位置および 周辺の遺跡 (S=1/10, 000)	3
第3図 本村・杉町遺跡第1次調査地 位置図 (S=1/2, 500)	4
第4図 調査区全体図、SD01・SD02断面図、	

SD01・SD02西壁土層図 (S=1/200)	5
-----------------------------	---

第5図 本村・杉町遺跡出土土器 実測図 (S=1/4)	7
第6図 本村・杉町遺跡出土石器 実測図 (S=1/4)	8

表目次

第1表 本村・杉町遺跡第1次調査 出土土器観察表	10
第2表 本村・杉町遺跡第1次調査 出土石器観察表	11

図版目次

図版1 調査地周辺航空写真(北より)、 SD01・SD02完掘状況(北東より)	14
図版2 SD01・SD02完掘状況(東より)、 調査地西壁土層(東より)	15
図版3 本村・杉町遺跡第1次調査 出土土器(1)	16
図版4 本村・杉町遺跡第1次調査 出土土器(2)	17
図版5 本村・杉町遺跡第1次調査 出土石器(1)	18
図版6 本村・杉町遺跡第1次調査 出土石器(2)	19

1 調査の経緯と経過

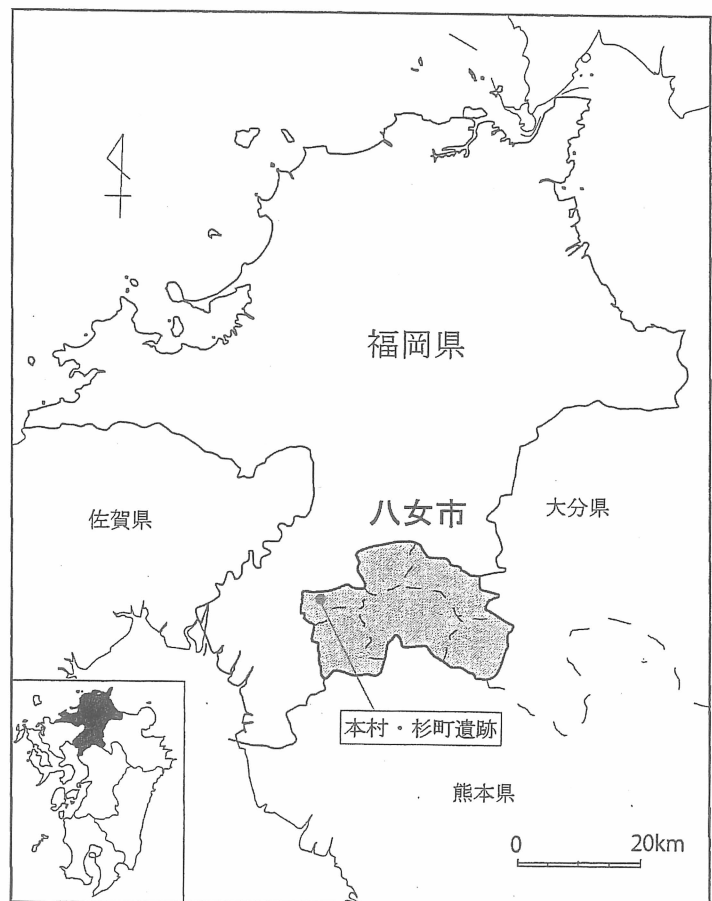
今回、発掘調査を実施した本村・杉町遺跡（第1次調査）は、福岡県八女市本村字杉町 685 番地 1・2、686 番地 1、693 番地 1、694 番地 1 に所在する。

調査に至る契機は、当該地に店舗用地造成および店舗建設 2 棟が計画されたことによる。令和 2 年 10 月に文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出があった。国道 442 号線を挟んだ北隣接地では古代の遺構・遺物の存在が知られていた。本件工事は、杭工事等の大規模な掘削を伴い、埋蔵文化財の存在が予想されたことから、埋蔵文化財の有無確認のための試掘・確認調査を令和 2 年 11 月に実施した。

その結果、地表下約 40 c m（当該地北側国道 442 号線歩道面から深さ 140 c m）から土器や古代に属する土坑・溝状遺構が確認された。現行の計画通りであれば、地下の埋蔵文化財の現地保存は困難であるため、当該地における文化財の保護について、事業者と協議をした。その結果、計画の変更および遺跡の保存は困難であった。以上を福岡県教育委員会に意見具申した結果、発掘調査の指示があった。その旨文書で事業者に伝え、事業主と発掘調査の覚書・協定書を締結し、埋蔵文化財に影響がある工事掘削箇所を対象に、店舗建設予定地の約 200 m²について、発掘調査による記録保存を実施することとなった。

八女市教育委員会では、令和 3 年 4 月に文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく発掘調査の報告をし、現地作業を令和 3 年 4 月 12 日から着手し、令和 3 年 5 月 21 日に完了した。なお、発掘調査日誌から経過を抜粋すると、4 月 12 日から重機掘削の準備を始め、14 日から重機による表土除去および、黒色粘土層までの掘り下げ、5 月 6 日から 11 日にかけて黒色粘土層を人力により除去、合間の 7 日に写真を撮影し、11 日から 14 日にかけて図面の作成を行った。18 日から 21 日にかけて重機による埋め戻しを行った。

出土遺物は整理箱 2 箱分であった。同年度中に整理作業（遺物の洗浄・注記・復元・作図および現場図面整理）を実施し、報告書作成作業を完了した。



第 1 図 本村・杉町遺跡の位置 (S=1/1, 250, 000)

なお、調査時の体制は、以下のとおりである。

【令和3年度】（現地作業・整理作業・報告書作成・刊行）

（事業主体） 八女市教育委員会

教育長	橋本 吉史
教育部長	原 信也
文化振興課 課長	鵜木 英希
同 課長補佐兼文化振興係長	森田 尚美
同 参事補佐兼文化財係長	
兼歴史文化交流館係長	片山 あづさ（総括・事務担当）
同 係 員	檀 佳克（調査・整理作業補助）
同 係 員	甲斐 郁（整理作業補助）
同 係 員	木原 堯
	（調査・整理作業・編集担当）
同 嘱 託	平 俊隆（調査・整理作業補助）

2 遺跡の位置と環境（地理的環境・歴史的環境）

八女市は福岡県の南部に位置し、東を大分県、南を熊本県と接する（第1図）。本報告で取り扱う本村・杉町遺跡第1次調査地は、八女市本村字杉町685番地1・2、686番地1、693番地1、694番地1に所在する。八女市役所から北側約550mに国道442号線が東西に通り、八女市立福島中学校がある。本村・杉町遺跡第1次調査地は、その福島中学校の西側約50mに所在し、国道442号線の南に隣接している。また、調査地北側約100mには筑後川水系の山ノ井川が、南北に蛇行しながら東西方向に流れる（第2図・第3図）。

本村・杉町遺跡周辺の現況地形は、調査地南東側約100mおよび南側100mで調査地の現況地盤から約20cm低くなっている。調査地北西約200mの地点は西側が東側に比べて約40cm低くなる。また、調査対象地の事前試掘・確認調査および周辺調査事例の結果から、本村・杉町遺跡第1次調査区の西側約35m地点より西側は、低湿地帯であることが判明している。よって、調査地は、東から広がる微高地の南西部に位置し、西側には湿地帯が広がることが想定される（第3図参照）。

周辺では、調査地東側約90mに福島中学校校庭遺跡があり、奈良時代から平安時代にかけての溝跡や水田跡が確認されている。また、調査地の南東約150mには、福島中学校校庭遺跡第2次調査地が存在し、縄文時代から弥生時代にかけての旧河川が発見されている。国道442号線を挟んだ、調査地の北50mでは、古代の遺構・遺物が確認されている。調査地の北約300mには本村・溝狭間遺跡があり（第2図）、中世の遺構・遺物のほかに、縄文時代から弥生時代にかけての遺物が確認されている。

以上のとおり、本村・杉町遺跡周辺では、縄文時代から平安時代にかけての遺跡が周辺に存在していることが分かる。



第2図 本村・杉町遺跡の位置および周辺の遺跡 (S=1/10,000)

3 調査の方法と成果

A 発掘調査の概要・方法

店舗建設予定地 2044.92 m²のうち、約 200 m²が本村・杉町遺跡第1次調査の調査区である。以下、基本土層と発掘調査方法について述べる。

① 基本土層

本村・杉町遺跡第1次調査地の基本土層について述べる。基本土層は、表土層（地表下約 40cm まで）の下位に遺構検出面の黄色ローム層があり、地表下約 160 cm で礫層となる。検出面は、調査区南端部で黄色ロームを確認し、北側の約 4 分の 3 は黒色土であった。このことから、調査区の大半は、溝状遺構と判断された。

② 発掘調査方針・経過

今回の発掘調査方針・経過について述べる。発掘調査では、重機を用いて表土を除去した。



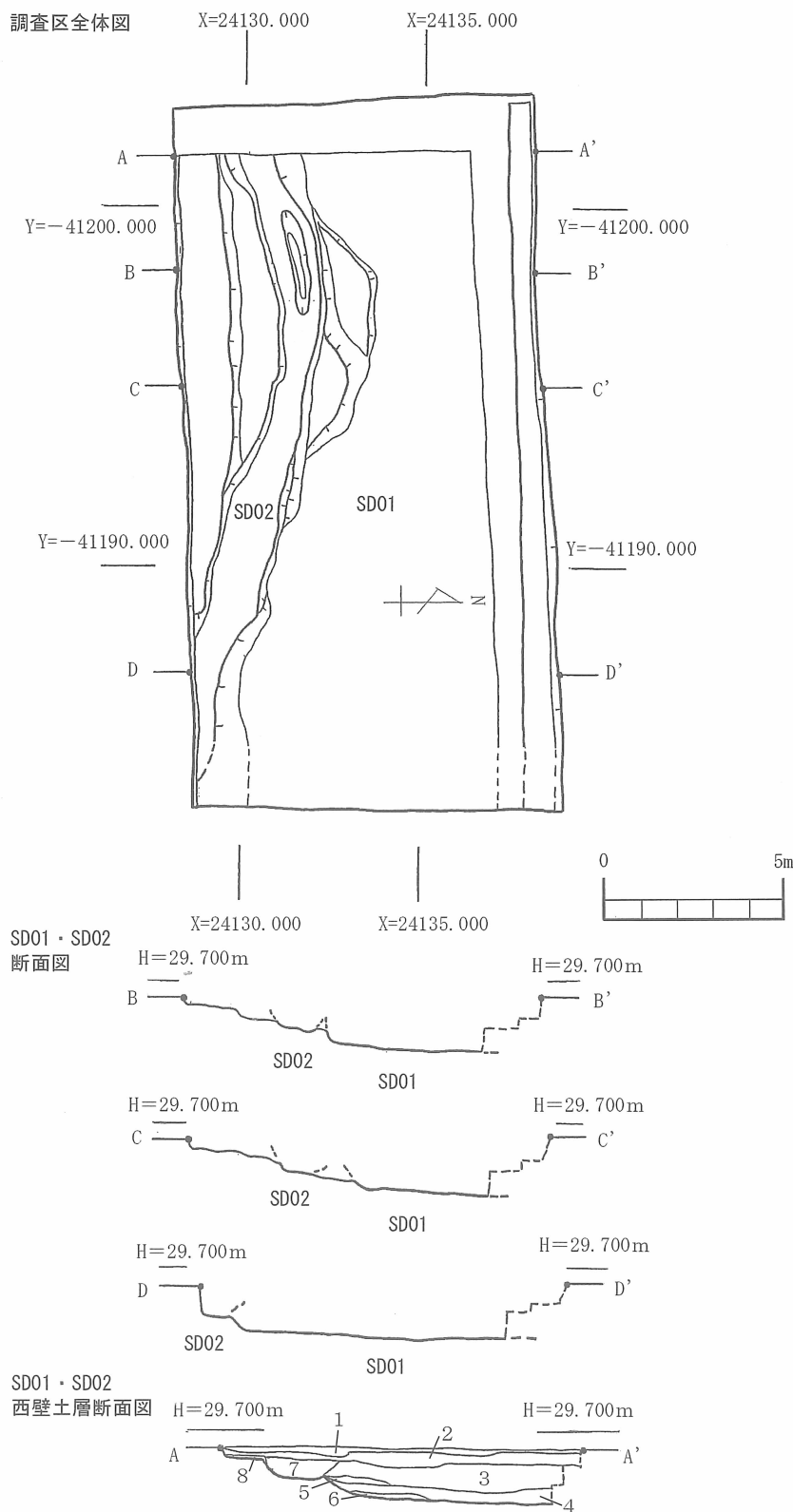
第3図 本村・杉町遺跡第1次調査地位置図 (S=1/2, 500)

その下位で溝状遺構 (SD01) を確認した (第4図)。SD01 は黒色土層 (地表下約 40 c m ~ 地表下約 120 c m)、黒褐色粘質土層 (地表下約 120 c m ~ 約 160 c m) で埋没している。SD01 の黒色土は、遺物の出土量が少なかったことから、遺構・遺物の有無を確認しつつ重機による掘削を行った。なお、重機で剥いだ土は、層位毎に分けて、遺物の採集を行った。その後、最下層は縄文土器等のまとまった出土が見られたことと、SD01 の形状を把握する必要があったことから、最下層の黒褐色粘質土および SD01 壁面は人力で掘削した。その後、記録作成を行った後、重機による埋戻しを行った。

なお、調査区東側は重機での掘削後、大雨と湧水の影響により壁が崩落した。調査区東端は、安全上の理由から、幅約 1.3 m の掘削は行わなかった (第4図点線箇所)。

B 発掘調査の成果

調査の結果、調査区全域にわたって、東一西方向に延びる溝状遺構 (SD01・SD02) を確認した。SD02 は SD01 上にあり、色調もほぼ同様に検出時に認識できておらず、掘削後の西壁での土層確認段階で初めて認識でき、平面でも存在と形状を認識できた。遺物は表土および SD01 から出土した。SD01 からは縄文土器、弥生土器、土師器、石器が出土し、表土層から須恵器、



- 1…黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) しまりが弱い：耕作土。2層由来の土が混じる。
 2…暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2) しまりが強い：SD01・SD02埋没後に堆積
 3…黒色土 (Hue2.5Y2/1) しまりが強い におい黄褐色土 (Hue10YR4/3) を含む：
 におい黄褐色土は黄色ローム層由来のもの。5層堆積時の層が存在するはずだが、認識できなかった。
 4…黒褐色粘質土 (Hue2.5Y3/1) しまりが3層に比べ弱い。6層堆積時の層が存在するはずだが、流されたのか認識できなかった。
 5…灰黄色粘質土 (Hue2.5Y6/2)、暗灰黄色土 (Hue2.5Y5/2) の混じり土。黄色ローム層由来のブロックが混じる。
 6…4層に礫が混じる。
 7…黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) しまりが強い。
 8…暗オリーブ褐色土 (Hue2.5Y3/3) しまりが弱い。

土師器が出土した。なお、前述のとおり、SD02は認識できていなかったことから、SD01とSD02の遺物を分けて把握することはできなかった。

4 遺構と遺物

A 遺構

遺構は溝状遺構2条が発見された。以下に概要を記す。

① 1号溝状遺構 (SD01) (第4図)

SD01は、調査区内を東—西方向に横断し、東西両端および北側は調査区外へ続く。調査区内でのSD01の幅は約8.6m～10.0m、長さは約18.2mである。深さは約1.0mである。SD01は、調査区南東から入り込み、調査区南西部で若干南側に曲がり、西側の調査区外へ抜ける。平面形状は不整形であり、人為的な痕跡は見受けられなかったことから、SD01は自然流路(河川跡)と考えられる。

第4図 調査区全体図、SD01・SD02断面図、SD01・SD02西壁土層図 (S=1/200)

SD01 は、土の違いから大きく上層（第4図3・5層）と下層（第4図4・6層）に大別できる。上層は黒色土であり、下層は黒褐色粘質土である。また、下層からは、縄文土器や石器および剥片が多く出土する。下の黒褐色粘質土を取り除くと、青色の礫層が現れ、そこから水が湧く。

西壁土層を観察すると、3層は黄色ローム層由来のにぶい黄褐色土が若干混じる黒色土で、調査区北部でわずかに沈み込み、北側調査区外に向かってわずかに上る。5層は3層に比べ、黄色ローム層由来のブロックが多く混じる。

4層は黒褐色粘質土である。西壁土層の観察や断面から北側に向かって緩やかに低くなる。6層は黒褐色粘質土に礫を含む層であった。

なお、SD01 掘削中に流木を確認した。このことは、SD01 が河川跡であることを補強する。

② 2号溝状遺構（SD02）（第4図）

SD02 は検出時に認識できていなかったため、上部を掘削してしまい、掘削後の西壁での土層確認段階で初めて認識でき、平面でも存在と形状を認識できた。SD02 は調査区南側で、SD01 上を東一西方向に横断し、調査区外へ延びる。調査区南西部で南にわずかに曲がる。幅と深さは西壁土層からの復元になるが、幅約 0.6 m、長さ約 15 m、深さ約 0.5 m であり、断面は逆蒲鉾形である。SD01 とほぼ同じ方向に南東から調査区に入り込み、調査区西部で南側に僅かに曲がり、西側の調査区外に続く。

また、西壁土層より SD02 は SD01 より新しい溝状遺構であると判明した。

B 遺物

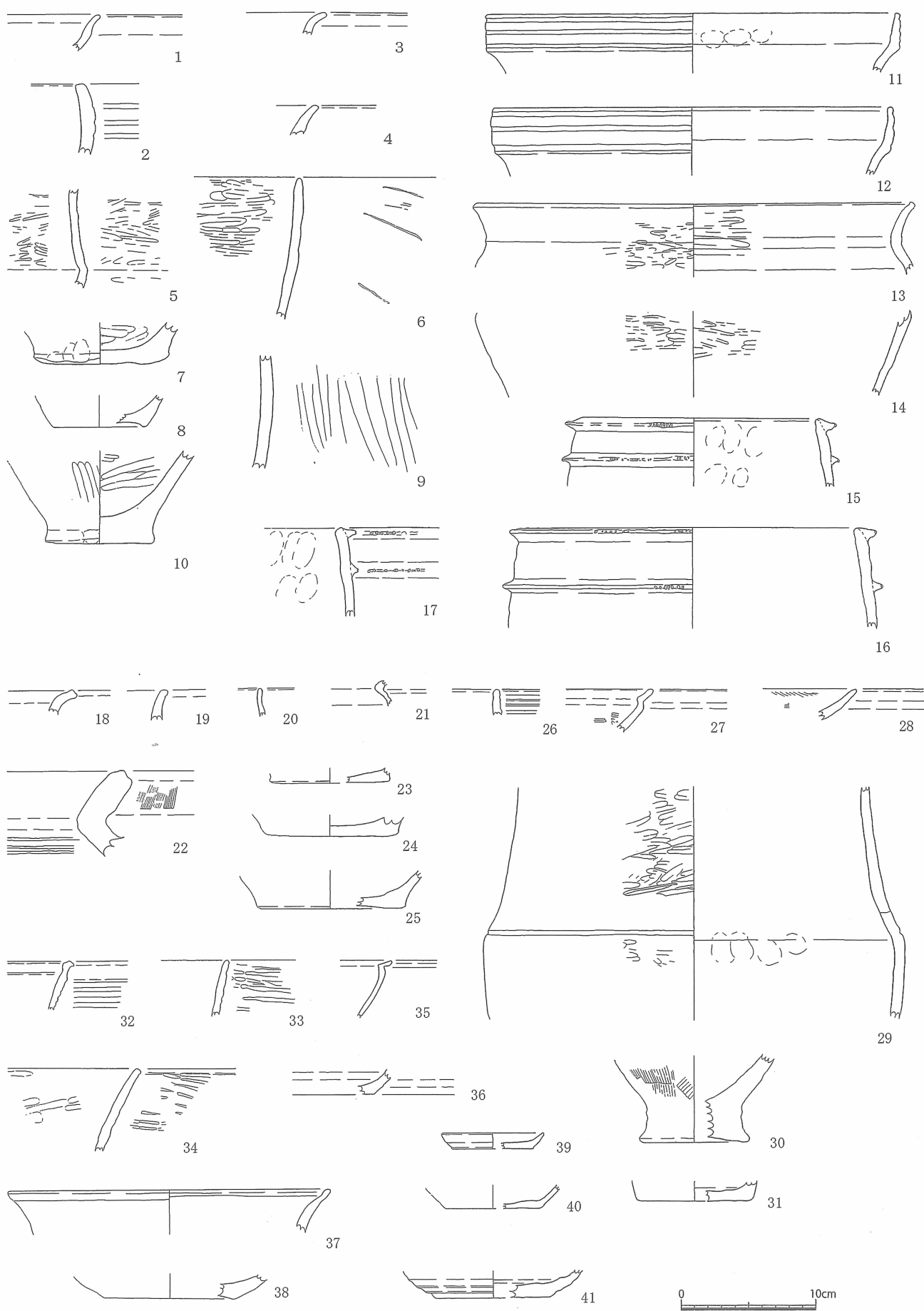
遺物は、SD01 と SD02、表土から出土している。ただし、SD01 と SD02 は掘削時の不手際で差異を認識できておらず、溝状遺構出土遺物は SD01 出土の遺物となっている。SD01 出土の遺物は、出土した層より、SD01 下層出土遺物と SD01 上層出土遺物に分けられた。また、調査時の不手際で SD01 出土は確実だが、上層か下層か不明なものに関しては SD01 出土遺物と記し、表土層出土を表土層出土遺物とした。以下に出土遺物を土器と石器に分けて示す。なお、各土器の詳細は第1表を、各石器の詳細は第2表を参照されたい。

① 土器

出土土器の胎土を観察し、含まれる砂礫の一部から胎土を a（石英＋片岩）、b（石英＋角閃石＋暗赤褐色粒）、c（石英＋片岩＋角閃石）、d（石英＋角閃石）、e（石英＋長石）、に分類した。胎土 b の土器は器形の特徴が分かるものが多く、そのほとんどが土師器であった。また、破片の残りがよく、口縁部形状および測定値から縄文土器と判断できた遺物およびそれに色調が似る破片には胎土 b が確認されなかった。このことから、暗赤褐色粒を含むならば、すくなくとも縄文土器とは言えないと思われる。

a SD01 下層出土土器（第5図1～17）

1～4 は口縁部片である。1 は口縁部が緩やかに内湾したのち、外反する。口縁端部は先細り丸くなる。2 は口縁部側面に沈線を施す。口縁端部は平らである。3・4 は口縁部が外反し、口縁端部は丸くなる。5 は胴部片である。上部でわずかに内傾し、下部で屈折して曲がる。6



第5図 本村・杉町遺跡出土土器実測図 (S=1/4)



第6図 本村・杉町遺跡出土石器実測図 (S=1/4)

は口縁部片である。口縁部は口縁端部に向かいわずかに外側に開き、口縁端部は先細り丸くなる。内面は黒色でミガキが施される。同一個体の破片と思われるものが3点出土し、うち2点は接合した。7・8は底部片である。7は平底である。8は底部外面がわずかに窪む。接合しないが、形状・色調・胎土がよく似た同一個体と思われる底部片がもう1点確認された。内面

が一部黒色である。9は胴部片である。胴部外面に条痕文を施す。わずかに内湾する。10は底部片である。底部で僅かに張り出し、外側に開いて立ち上がる。内面の一部が黒色である。

11～14は縄文土器の深鉢である。11・12は口縁部片で口縁部が垂直に立ち上がり、3条の沈線が水平方向にめぐり、12は内面が一部黒色である。13は外反する口縁部片で、口縁部内面がわずかに窪む。14は胴部片である。13・14は胎土、色調から同一個体と思われる。他にも接合しなかったが同一個体と思われる破片を8点確認した。15～17は甕の口縁部であり、口縁部と胴部に刻目突帯を有する。15～17は口縁部形態から弥生時代前期である。

b SD01 上層出土土器（第5図 18～25）

19は甕の口縁部片である。口縁端部は角があり、外面口縁端部がわずかに張り出し、胎土bである。

18・20は口縁部片である。18は口縁部が外反し、口縁端部がわずかに張り出す。内面の3分の2近くが黒色である。20はわずかに内傾する。器壁が極めて薄く、胎土はbである。21は頸部片と思われる。くびれが確認でき、「く」字形をする。外面と内面下部に僅かなふくらみが存在する。内面は黒色である。22は口縁部片である。口縁端部と頸部でわずかに窪む。胎土はeである。23～25は底部片である。すべて平底である。24は全体的に摩滅しており、調整が不明瞭である。25は底部が外側に開いて立ち上がる。内面は器壁が剥落しており、調整が不明瞭である。

c SD01 出土土器（第5図 26～31）

26・27は口縁部片である。26は口縁部に4条の沈線が確認されるが、上から4番目の沈線で破損したと思われる。27は口縁部が緩やかに内湾した後、屈曲し、外側に張り出す。SD01下層出土の1（第5図）と同様のものとも思われる。

28は土師器の高坏である。坏部が内湾することから時期は古墳時代後期と思われる。胎土はbである。

29は縄文土器の深鉢の胴部である。胴部残存下部がわずかに膨らみ、最大径部に沈線が存在する。接合しないが胎土、色調から同一個体と思われる土器片が9点確認された。

30・31は底部片で、平底である。30は底端部がわずかに外側に張り出し、底部が外側に開く。熱を受けたのか外面底部が橙色に変色する。

d 表土層出土土器（第5図 32～41）

32～35・37は口縁部片である。32は口縁端部が外反し、内面は僅かに段差ができる、外面に条痕文を施す。33・34は口縁部外面に条痕文を施す。34は口縁端部の断面が四角形状である。35は口縁部に向かい外側に開き、外側に向かって屈折する。内外面ともに器壁が剥落し、調整は不明瞭である。37は口縁部が外反し、口縁部内面で段を作り、口縁端部で丸くなる。口縁部外面には1条の線がほぼ水平方向にめぐり、内面は黒色である。38は底部片であり、底部外面が窪む。内面は黒色である。

36は土師器の底部片である。時期は不明であるが、成形時に回転ナデを行った痕跡が見てとれた。胎土はbである。39は土師器の小皿である。復元口径7.6cmと器高1.2cmであることから、時期は14世紀前半から14世紀後半と判断した。40は土師器の坏の底部片で底

部が平らで、底部から体部にかけて外側に開く。41は須恵器の坏の底部で、平底である。胎土はbである。

② 石器

a SD01 下層出土石器（第6図1～4）

1・2はスクレーパーである。1は表面左側に刃部を整形する。表面右側には、自然面が残る。2は下部に表裏両面から刃部を整形する。3は石錘の未製品と思われ、製作中に廃棄されたものと考えられる。4は用途不明の磨製石器である。平面は半円状の形をしており、断面は

第1表 本村・杉町遺跡第1次調査 出土土器観察表

挿図番号	出土地点	器形	焼成	色調 (外面／内面)	胎土	成形・整形手法等	寸法		備考（種類・残存等）	実測図 番 号
							口径 (底径)	器高 (残存高)		
第5図1	SD01 下層	縄文土器 浅鉢	軟質	暗灰黄／暗灰黄	a	外面はナデ。内面は剥離により調整不明。	-	(2.7)	口縁部小片。	R52
第5図2	SD01 下層	縄文土器 浅鉢	軟質	灰黄／灰黄	a	内外面ともにナデ。	-	(5.2)	口縁部小片。	R58
第5図3	SD01 下層	縄文土器 浅鉢	軟質	暗灰黄／黄褐	c	外面はヨコナデ。内面はヨコナデ、ナデ。	-	(1.7)	口縁部小片。外面に煤が付着。	R54
第5図4	SD01 下層	縄文土器 浅鉢	軟質	灰黄褐／灰黄褐	c	内外面ともにヨコナデ。	-	(2.2)	口縁部小片	R56
第5図5	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	褐灰／褐灰	c	内外面ともにミガキ。	-	(7.4)	胴部片。	R22
第5図6	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	黒褐／黒	d	外面は条痕。内面はミガキ、ナデ。	-	(9.0)	口縁部片。内面に炭化物が付着。	R18
第5図7	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	暗黄褐／暗黄褐	a	外面はナデ。内面はミガキ、ナデ。	(10.1)	(3.1)	底部。	R60
第5図8	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	灰褐／褐灰	a	内外面ともにナデ。	(6.9)	(2.3)	底部が1／6程残存	R13
第5図9	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	褐灰／黒褐	a	外面は条痕。内面はヨコナデ。	-	(8.5)	条痕文土器。 胴部片。	R19
第5図10	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	にぶい黄橙／褐灰	d	胴部外面はミガキ。底部外面は指オサエ、ナデ。 内面はナデ後ミガキ。	(7.0)	(6.8)	底部。	R103
第5図11	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	にぶい黄褐／にぶい黄褐	a	外面は沈線後ナデ。内面はナデ後指オサエ。	30.9	(4.5)	口縁部が1／4程残存。	R61
第5図12	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	灰黄／灰黄	a	外面は沈線後ナデ。内面はナデ。	30.2	(5.0)	口縁部が1／8程残存。	R102
第5図13	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	褐灰／黒	a	内外面ともにミガキ。	33	(5.45)	口縁部が1／8程残存。	R20
第5図14	SD01 下層	縄文土器 深鉢	軟質	褐灰／暗灰	a	内外面ともにミガキ。	-	(4.5)	胴部が1／8程残存。 最大径は32.5cm	R21
第5図15	SD01 下層	弥生土器 甕	軟質	黒褐／褐灰	c	外面はヨコナデ。内面はナデ後指尾オサエ。	18.6	(5.0)	口縁部片。外面の一部に煤が付着。	R7
第5図16	SD01 下層	弥生土器 甕	軟質	褐灰／灰黄褐	d	外面はヨコナデ。内面はナデ。	27.3	(7.5)	口縁部が1／8程残存。刻目突帯の間に煤が付着。	R11
第5図17	SD01 下層	弥生土器 甕	軟質	黒／黄灰	c	外面口縁部はヨコナデ。外面胴部はナデ。 内面は指オサエ。	-	(6.6)	口縁部片。	R57
第5図18	SD01 上層	弥生土器 甕	軟質	にぶい橙／にぶい橙	a	内外面ともにナデ。	-	(1.8)	口縁部片。	R105
第5図19	SD01 上層	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙／浅黄	b	内外面ともに調整不明。	-	(2.4)	口縁部小片。	R14
第5図20	SD01 上層	弥生土器 器形不明	軟質	にぶい黄橙／灰白	b	内外面ともにナデ。	-	(2.1)	口縁部小片。口縁端部が黒色。	R15
第5図21	SD01 上層	縄文土器 浅鉢	軟質	灰褐／黒	a	内外面ともにヨコナデ	-	(1.9)	胎土は同遺跡出土の縄文土器に似る。	R12
第5図22	SD01 上層	弥生土器 甕	軟質	にぶい黄橙／にぶい黄橙	e	外面はハケメ、ナデ。内面はナデ	-	(6.3)	口縁部片。	R106
第5図23	SD01 上層	弥生土器 甕	軟質	橙／褐灰	d	外面は調整不明。内面はナデ。	(9.0)	(1.1)	底部が1／5程残存。	R16
第5図24	SD01 上層	縄文土器 深鉢	軟質	にぶい黄橙／にぶい黄橙	d	内外面ともに調整不明。	(9.8)	(1.6)	底部。底部黒斑。	R104
第5図25	SD01 上層	弥生土器 甕	軟質	にぶい黄橙／灰黄褐	a	外面はナデ。内面は剥落しており調整不明。	(11.1)	(2.9)	底部が1／6程残存。	R10
第5図26	SD01	縄文土器 浅鉢	軟質	灰黄褐／にぶい黄褐	a	外面はナデ後沈線。外面はナデ。	-	(1.9)	口縁部小片。	R3
第5図27	SD01	縄文土器 浅鉢	軟質	灰黄褐／灰黄褐	a	外面はナデ。内面はナデ後ミガキ。	-	(3.2)	口縁部小片。	R50
第5図28	SD01	土師器 高坏	軟質	にぶい黄褐／にぶい黄褐	b	外面はナデ。内面はハケメ。	-	(2.5)	口縁部小片。	R2
第5図29	SD01	縄文土器 深鉢	軟質	にぶい黄橙／にぶい黄橙	a	外面はミガキ、沈線。内面はナデ後指オサエ。	-	(17.2)	胴部片。 最大径31.4cm。	R63
第5図30	SD01	弥生土器 甕	軟質	灰黄／灰黄	a	外面はナデ、ハケメ。内面の調整は不明。	(8.2)	(6.4)	底部が1／4程残存。	R1
第5図31	SD01	縄文土器 深鉢	軟質	にぶい橙／にぶい橙	a	内外面ともにナデ。	(8.6)	(1.5)	底部が1／4程残存。内面に炭化物が付着。	R100
第5図32	表土層	縄文土器 浅鉢	軟質	暗灰黄／暗灰黄	c	外面は条痕。内面は不明。	-	(3.6)	口縁部片。	R55
第5図33	表土層	縄文土器 深鉢	軟質	暗灰黄／灰黄	a	外面は条痕文。内面はナデ。	-	(4.05)	口縁部片。	R59
第5図34	表土層	縄文土器 深鉢	軟質	暗灰黄／暗灰黄	a	外面はタタキ。内面はミガキ。	-	(6.1)	口縁部片。	R51
第5図35	表土層	縄文土器 浅鉢	軟質	にぶい黄橙／にぶい黄橙	d	内外面ともに剥落しており調整不明。	-	(4.5)	小片。胴部外面が被熱により一部茶色に変化。	R8
第5図36	表土層	土師器 坏	軟質	浅黄橙／橙	b	外面回転ナデ。内面ナデ	-	(1.9)	底部小片。	R9
第5図37	表土層	縄文土器 浅鉢	軟質	黄灰／黒	d	外面はナデ。内面はミガキ。	24.0	(3.2)	口縁部が1／8程残存。	R101
第5図38	表土層	縄文土器 浅鉢	軟質	灰黄褐／暗灰黄	d	外面はナデ。内面は不明。	(9.6)	(1.8)	底部が約1／4程残存。	R53
第5図39	表土層	土師器 小皿	軟質	にぶい橙／浅黄橙	砂礫少	内外面ともにナデ。底部は外面は調整不明	7.6 (6.0)	1.2	調整の残りが悪い。	R5
第5図40	表土層	土師器 坏	軟質	浅黄橙／浅黄橙	b	外面は調整不明。内面はナデ後指オサエ。	(7.0)	(1.8)	調整の残りが悪い。	R4
第5図41	表土層	須恵器 坏	硬質	灰／灰	d	内外面ともに回転ナデ。内面は回転ナデ後指オサエ。 底部は反時計回りに回転ヘラ切り	(8.4)	(2.0)	底部が1／4程残存。	R6

※胎土欄の記号は、含まれる砂礫の一部に着目したものであり、下記の通りである。

a：石英＋片岩（矢部川流域に特徴的な胎土） b：石英＋角閃石＋暗赤褐色粒（筑後～熊本地域に特徴のある胎土） c：石英＋片岩＋角閃石 d：石英＋角閃石 e：石英＋長石

第2表 本村・杉町遺跡第1次調査 出土石器観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	色調 (外面 /内面)	材質	寸法				備考(種類・残存等)	実測図 番 号
						長さ	幅	厚さ	重さ		
第6図1	SD01 下層	石器	スクレーパー	黒	黒曜石	4.7	2.5	0.5	5.5	剥片石器。	R25
第6図2	SD01 下層	石器	スクレーパー	灰	安山岩(サヌカイトか)	9.7	4.1	1.1	55.4		R110
第6図3	SD01 下層	石器	石錘(未製品)	灰	安山岩(サヌカイトか)	5.4	6.85	1.5	37.8		R109
第6図4	SD01 下層	石器	用途不明石器	灰	安山岩?	5.5	6.2	1.0	47.4		R108
第6図5	SD01 上層	石器	石包丁(未製品)	灰白	片岩	16.9	6.9	1.8	268	荒割段階か。	R107
第6図6	SD01 上層	石器	石包丁	灰	片岩	2.3	4.9	0.2	4.8	ミニチュア品。	R17
第6図7	SD01 上層	石器	スクレーパー	灰	安山岩(サヌカイトか)	5.5	5.6	1.0	32.3		R68
第6図8	SD01 上層	石器	磨製石斧	灰白	片岩	7.6	4.25	1.15	60.4	上部が欠損。	R62
第6図9	SD01 上層	石製品	用途不明石器	灰	泥岩?	10.7	4.85	3.1	245	上端部が一部欠損し、下端部が一部剥離する。	R64
第6図10	SD01 上層	石器?	用途不明石器	灰白	軽石	4.8	5.8	1.8	50.6	裏面に欠損あり。	R23
第6図11	SD01	石器	石鏃(未製品)	オリーブ黒	安山岩	2.3	1.7	0.45	1.5	裏面が欠損。	R28
第6図12	SD01	石器	石鏃(未製品)	黒	黒曜石	3.5	1.4	0.3	1.3		R65
第6図13	SD01	石器	スクレーパー	灰	安山岩	4.35	6.65	1.8	39.9	下部に表面・裏面から刃部を形成	R24
第6図14	表土	剥片	剥片	灰	安山岩(サヌカイトか)	4.8	3.4	1.2	25.3	剥片	R112

扁平な形をしている。裏面は極めて平滑に研磨され、下部に使用による剥離も認められ、スクレーパーとしての使用も考えられる。安山岩製と思われる。

b SD01 上層出土石器(第6図5～10)

5は石包丁の未製品で、半月形状に荒割した段階で廃棄されたようである。下部に表裏両面からの刃部整形痕が認められる。6は石包丁形のミニチュア品で、研磨により、図下部に刃部を形成する。刃こぼれや紐ずれ痕跡などの使用痕跡は確認できなかった。7はスクレーパーと思われる。三日月形をしている。刃部は表裏両面から整形しており、先端部が欠損している。8は扁平磨製石斧である。図上部が欠損する。9は用途不明の磨製石器である。底部の断面は楕円形をしており、平面は舌状の形状をしている。全体が研磨される。平滑な底面を除き全体に敲打された痕跡があり、表面下部には研磨された擦痕も認められる。泥岩製と思われる。10は用途不明の磨製石器である。平面は図下部が湾曲した長方形で、断面は舌状形、下端がわずかに細くなる。裏面は下半部が剥離する。その他の面は研磨されており、図上部や左右両端部は平滑面が認められる。石材は軽石である。

c SD01 出土石器(第6図11～13)

11・12は石鏃の未製品である。11・12ともに製作中に破損し、廃棄されたと思われる。12は先端部と表裏両面に刃部整形が認められ、表面右上部は表裏両面から抉りを整形している。13はスクレーパーである。下部に表裏両面から刃部を整形している。

d 表土層出土石器(第7図14)

14は使用痕跡のある剥片である。かぎ爪形をしている。下部に使用による剥離が認められる。

e 石器剥片

その他、図示していないが、主にSD01下層から黒曜石の剥片が大量に見つかった(図版6-5)。ほとんどが黒色であるが、剥片の中には乳白色のものも混じり、明らかに産地が異なるものが含まれていた。また、安山岩の剥片も見つかっている。(木原・平)

5 総括

以上、本村・杉町遺跡第1次調査の概要を述べた。最後に、今回の調査で知りえた知見と、今後の課題について述べる。

本村・杉町遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地「本村遺跡群」の範囲内で、店舗用地造成に伴う試掘・確認調査で弥生時代から古代にかけての集落遺跡に伴う遺構が存在することと、敷地西側約15mは湿地帯であり集落跡の西端であることが判明した。当該造成地の遺跡の大半は盛土造成のため現地保存としたが、東側店舗敷地の遺跡保存が困難となったため、建物箇所のみ記録保存発掘調査を実施したのが今回の第1次調査である。よって、現在の店舗駐車場の下位には、弥生時代から古代にかけての集落跡がそのまま現地保存されている。

発掘調査では、調査区のほぼ全域が河川跡で、今回の調査区はほぼ全域が、概ね東西方向に流れる自然流路であることが判明した（SD01）。SD01は大きく上層と下層に分層され、河川が埋没しつつも一定期間この場所に流れていた状況を示す。

SD01内からは、集落遺跡に伴う弥生時代から古代にかけての土器等の出土があったが、出土状況に規則性やまとまりは見出されなかった。今回の調査地の東側には、国道442号八女バイパス発掘調査事例をはじめ、八女市でも有数の弥生時代集落跡が存在することが知られている。今回発見された土器は、近隣の上流から洪水等によりもたらされた可能性が高く、本村遺跡群のみならず東側上流の大島遺跡群・納楚遺跡群の様相を知るうえでも、重要な資料を得ることができた。

特筆されるのは、SD01最下層付近を中心として出土した縄文時代後期土器（三万田式前後）である。縄文時代の土器は八女市域では出土例が現段階では少ない。流路内からの出土で元位置を保った出土事例ではないが、八女市の縄文時代の様相を知る上では、まとまった良い資料を得ることができた。

また、出土事例が極めて少ないミニチュアの石包丁形製品が出土した。弥生時代の所産と思われるが、実用品ではなく、性格等は類例や事例増加の上、今後検討が必要である。

末筆となるが、今回の発掘調査は河川跡・流路跡のみの発見であったが、事前の試掘調査等の結果から、今回の調査地がある店舗用地およびその近隣には、弥生時代から中世にかけての集落跡が良好に残存していることが今回の調査で明白となった。今後も周辺での開発には細心の注意を要することを再度述べて、本報告の締め括りとする。（甲斐・檀）

PLATES

図 版

図版1 調査地周辺航空写真（北より）、SD01・SD02 完掘状況（北東より）



1 調査地周辺航空写真（北より）



2 SD01・SD02 完掘状況（北東より）

図版2 SD01・SD02 完掘状況（東より）、調査地西壁土層（東より）



1 SD01・SD02 完掘状況（東より）



2 調査地西壁土層（東より）



1 SD01 下層出土土器 (第5図)



2 SD01 下層出土土器 (第5図)



3 SD01 下層出土土器 (第5図)



4 SD01 下層出土土器 (第5図)



10

5 SD01 下層出土土器 (第5図)



11



12

6 SD01 下層出土土器 (第5図)



13



14

7 SD01 下層出土土器 (第5図)



15



16



17

8 SD01 下層出土土器 (第5図)



22

1 SD01 上層出土土器(第5図)



24

25

23

2 SD01 上層出土土器(第5図)



26



27

3 SD01 出土土器(第5図)



29

4 SD01 出土土器(第5図)

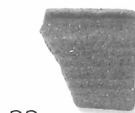


31



30

5 SD01 出土土器(第5図)



32



33



34

6 表土層出土土器(第5図)



37



38

7 表土層出土土器(第5図)



36



39



40



41

8 SD01 表土層出土土器(第5図)



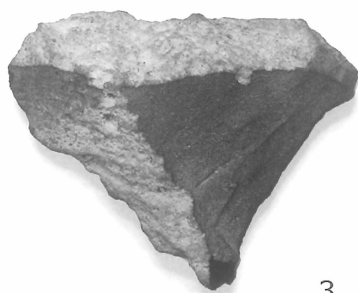
1

1 SD01 下層出土石器 (第6図)



2

2 SD01 下層出土石器 (第6図)



3

3 SD01 下層出土石器 (第6図)



4

4 SD01 下層出土石器 (第6図)



5

5 SD01 上層出土石器 (第6図)



6

6 SD01 上層出土石器 (第6図)



7

7 SD01 上層出土石器 (第6図)



8

8 SD01 上層出土石器 (第6図)



9



10

1 SD01 上層出土石器 (第6図)

2 SD01 上層出土石器 (第6図)



11



12



13

3 SD01 出土石器 (第6図)

4 SD01 出土石器 (第6図)



5 SD01 出土石器剥片

報 告 書 抄 録

ふりがな	もとむら・すぎまちいせき							
書 名	本村・杉町遺跡 1							
副 書 名	店舗建設に伴う埋蔵文化財遺跡発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	八女市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 号	第 1 3 8 集							
編 著 者 名	(編者) 木原堯 (著者) 甲斐郁・木原堯・平俊隆・檀佳克							
編 集 機 関	八女市教育委員会							
所 在 地	〒834-8585 福岡県八女市本町 6 4 7 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331							
発 行 年 月 日	西暦 2022 (令和 4) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとむら・すぎまちいせき 本村・杉町遺跡 第 1 次調査 (本村遺跡群)	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 もとむらあさすぎまち 本村字杉町	402109	405003	33° 13' 0"	130° 33' 29"	20210412 ～ 20210521	約 200 m ²	店舗建設
所収遺跡	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
本村・杉町遺跡 第 1 次調査 (本村遺跡群)	集 落 跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代		溝状遺構 2		縄文土器・弥生土器・土 師器・須恵器・石器		
要 約	本報告書は、店舗建設に伴い発掘調査を実施した、本村・杉町遺跡第 1 次調査に関する報告である。 今回の調査区は、ほぼ全域が概ね東西方向に流れる自然流路であることが判明した (SD01・SD02)。SD01 内からは、弥生時代から古代にかけての土器等の出土があり、上流の集落跡から洪水等によりもたらされた可能性が高い。 SD01 では最下層付近を中心として、縄文時代後期土器が出土した点が注目される。 また、出土事例が極めて少ないミニチュアの石包丁形製品が出土した。実用品ではなく、性格等は今後検討が必要である。							

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

本村・杉町遺跡 1

八女市文化財調査報告書
第 138 集

令和 4 年 3 月 31 日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田1899-1